

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 いつの間に「神話」とこんなに縁が出来たのだろうか？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 利博, Yamada, Toshihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000440

いつの間に「神話」とこんなに縁が 出来たのだろうか？

山田利博

今年度四月、文学部日本文学科に採用された。川崎市の生まれで現在は厚木と、根っからの関東人ではあったが、前任校は宮崎大学だった。

前任校に赴任する時、非常勤をしていた国士舘大学の、先輩でもある上代文学が御専門の故西条勉先生に言われた言葉が、「先生はこれから神話のメッカに行かれるんですね。うらやましいです」だった。星が好きだったのでギリシア神話には小学生の時から親しんでいたし、あまり知られていないかも知れないが、専門としている源氏物語にも、日本書紀からの引用はあるから、自身も興味を抱いていた私は、その言葉通りの気持ちで任地に赴いたのだった。

高千穂峰も確かに素晴らしいけれども、同名の山が鹿児島にもあるし、宮崎で一番感動したのは神楽の多さであった。もちろん本学の小川直之先生の方が詳しいが（先生は「みやざきの神楽魅力発信委員会」の委員長で、私はヒラの委員）、少し古いデータではあるけれども、一つの県に二〇四というのは、日本一の数である。

着任早々その魅力に取り憑かれ、宮崎県には鉄道がほとんど通っていないので、神楽を見るためもあった、こちらでは持っていなかった免許を取って車を買ひ、初心者でありながら尻の痛みに苦しみつつ、四時間かけて初の高千穂神楽に出かけた二十二年前が、つい昨日のことに思い出せる。もちろん研究費ではあるが、撮影のためにデジタルビデオカメラを買ひ、今はハードディスクに録画できるので、そうした苦労はないけれども、当時はミニ・カセットとは言えフィルムに録画していたので、二時間おきに交換が必要だった。しかし完備はきついので、交代要員として研究室

の学生を連れては行ったものの、はっと気がつくとも全員寝ていて、見物客の誰かがぶつかったのか、カメラはあらぬ方を向いており、結局舞は撮れていなかったのは、今となっては笑える思い出である。

それでも神楽の研究で、今のところ唯一である科研費も貰え、およそ二十ある高千穂神楽は全て、同じく二十六ある椎葉神楽の半ばくらい、他に点々とある神楽のいくつかを見終わったところでこちらとの御縁が出来、道半ばで着任することとなった。宮崎の神楽は冬か春の三か月ずつの休日にしか行われなし、同日に開催されるものもあるため、全て見終わるのには大体五十年はかかると言われており、終わってからこちらへ等と都合の良いことはあり得ない。それは重々承知のことであるから、それほど未練があったわけではないが、それでも、高千穂より古態を示すと思われる椎葉神楽を極められなかったのが少し残念と思っていた時に、またしても友人に言われた言葉がある。それは、「前が宮崎で今度が國學院か。スゴイね」である。そう言われてみれば國學院も日本神話の中心であると気づいた直後に浮かんだ思いが、タイトルにした、「いつの間に『神話』とこんなに縁が出来たのだろうか？」であった。

別に悪いことをした覚えはないが、かといって私も日本人の端くれであるから、「困った時の神頼み」くらいしかない。いやむしろ、父を亡くしているので、法事の方を熱心にやるくらいである。なにになにゆえ神が私を気に入ってくださったのか分からず、愛する『サウンド・オブ・ミュージック』の「Something Good」を口ずさみたくなる気分だが、私にとってはラッキーなため、この「御縁」は大切にしたい。ということ、一生懸命働きますので、皆様よろしく願います（笑）。

（日本文学）